

こどものしなやかさを守る場所、こどもの里

重江良樹

〈講師紹介〉

大阪府出身。ビジュアルアート専門学校大阪を卒業後、映像制作会社勤務を経てフリー。映像制作・企画「ガーラフィルム」代表を務める。2008年に「特定非営利活動法人 こどもの里」にボランティアとして入ったことがきっかけとなり、2013年より初監督作品となる「さとにきたらええやん」の撮影を始める。

〈講演〉

皆さん、こんにちは。この映画の監督をさせていただきました重江と申します。今日はよろしく申し上げます。

1. 映画の作成にいたるまで

(1) こどもの里との出会い

僕がこどもの里と出会ったのは、ちょうど10年前です。一旦、社会に出て働いていましたが、映像ジャーナリストみたいなものに憧れていて、そういったことで映像の専門学校に入りました。卒業制作のとき、これは1人でちっちゃいカメラを持って取材するということなので、大阪で何か社会性がある街といたらどこだろうとなったときに、やっぱり大阪だと西成、釜ヶ崎です。暴動があったりとかね、警察24時とかでよく注目される街なんですけれども、当時の僕もそういった先入観を思いっきり持ちながら、釜ヶ崎の街を歩いていました。

歩いていたら、ほんとうにうわさどおりの光景というか、言葉は悪いですけど、すごい汚いおっ

ちゃんがいたりとか、道端で昼間から寝ていたり、円陣を組んで酒盛りしていたりとか。そういった自分の街じゃなかなか見なかった光景がこの街で見られるわけだったんですけれども、そういうふうに街を歩いていたら、いきなり目の前に子どもが2人、真夏やったんですけど、短パン一丁で子ども2人が目の前にあらわれて、何でここに子どもがいるんだろうと思ってすごく不思議だったんです。

そんな子どもたちが入っていった建物がこどもの里で、僕は何も考えていなかったの、そのまま子どもの後をついていき、里に入って職員さんに話を聞いていると、子どもの遊び場ですって言われたので、何でこんなおっさんの街に子どもの遊び場があるのだろうってすごい不思議で。こどもの里の中に入ってきよとんとしていたら、映画にもあったんですけど、あんな感じで野球とかをしていた子どもたちに、自分、何でそんなところに突っ立っているのみたいな、暇なんやったら遊ぼうや、みたいな感じで遊びに誘われて、それで半日近く過ごしているうちに、だんだんこどもの里というところが楽しくなってきました、通ううちに撮影云々とかどうでもいいやって思うようになり、5年が過ぎましたね。

(2) 撮影のきっかけ

その5年の間に、夜回りだとか、いろんな勉強会みたいな、映画の中でもあったと思うんですけど、なかなか普通に生きていたら教えてくれない社会のことであると人権のことであるとか、そういったことを僕自身、こどもの里で学ばせても

らった5年間で、今にもつながるんです。

そういう感覚があったのと、その5年後、2012年とかだったのですが、ちょうど時の市長、橋下徹さんが、「子どもの家事業」って、簡単にいうと学童保育よりいい条件といい補助金があるという大阪市独特の事業があったんですけど、それを廃止するというときに、里職員一同しかり、子どもたちも、その保護者たちも、街のおっちゃんたちも一緒になって反対の声を上げてくれたりして、そういう1つの子どもの居場所を守ろうとする大人たちがすごくすてきだなと思ったので、こういう子どもの居場所を守ろうとする大人たちの姿勢というの撮りたいなと思って、映画を撮らせてくださいということをお願いしました。

(3) こどもたちのその後

2013年から2015年、2年間の撮影記録です。だから、映画に出ていた中学生の男の子は中学校を卒業したんですけども、15歳で3年間、高校も卒業しましたね。飲食店に就職しました。その後、卒業して飲食店で働きながら、こどもの里に今も遊びにというか、ボランティアしてくれたりとか、ちっちゃい子の面倒を見てくれたりだとかしてくれています。

映画に出ていた高校生の女の子も、高校を出て、高校生の女の子は里子としてこどもの里で生活していたんですけども、こどもの里を出たのは20歳です。高校を卒業して、働きながらこどもの里で生活をして、措置延長という形で、20歳の誕生日のときにこどもの里を出て、1年ちょっとぐらいですか、こどもの里でもともと一緒に生活していたOGの女の子とルームシェアという形で生活をして、その子もちょっと何かいろいろ人生の動きがあったので、高校生の女の子もひとり暮らしするということで、今はひとり暮らしをしています。

もともとこどもの里のファミリーホームは、里親、荘保さん、デメキン館長がああ地域の子どもを地域の中で育てたいという思いがあって、ずっと地域の子どもたちを受け入れて一緒に生活して

いたんです。だから、高校生の女の子の実家もすごく近くて彼女が今住んでいるところも近いんです。

お母さんの話も後でしたいと思うんですけど、お母さん自身も健康面とか精神面でそんなにはないので、彼女は仕事に行って、帰ってきて、夕ご飯をお母さんの家、実家に帰ってお母さんと食べて、また自分の家に帰る。休みの日はこどもの里を手伝ってくれたりとか、そういったことをしてくれて、すてきなお姉さんになっています。

5才の男の子は、自転車をこいでいた男の子なんですけれども、今は4年生で、あんな感じで遊んでいますけれども、このときは週に2回、お泊まり、一時宿泊という形で里に泊まりに来ていました。今も週に1度、泊まりに来ています。映画の中でも、お母さんのしんどさみたいところ、ちらっとあったと思うんですけど、やっぱり幼少期に厳しい体験をしてトラウマを抱えて生きてきた大人、その大人の解決というのはなかなかすごく難しく、お母さんは今も週1回、通院してカウンセリングを受けているんです。やっぱりカウンセリングを受けるというときはすごくしんどいです。撮影時もそうだし、今もそうだけど、病院に行くときにあの子はお泊まりという形で、今も泊まりに来ています。彼自身はあんな感じで、里に来て遊んでいます。

2. こどもの里とはどんなところが

(1) 学童保育とつどいの広場事業

こどもの里について、こどもの里ってどんなところ？とよく聞かれるので、その説明をしたいと思うんですけど、今日、こどもの里のリーフレットを持ってきました。そこに置いているので、お帰りの際にでもご自由にお持ち帰りいただけたらと思います。

こどもの里の事業としては、まずは学童保育と言われるものです。これは大阪市からの委託事業で、大阪市からお金が出ています。対象は小学生です。ご両親が働いているとか、条件はあるんで

すけど、そういった条件の子どもたちが来るための制度で学童保育です。

次につどいの広場事業って、大阪市の呼び方なんですけど、乳幼児とその保護者の居場所という形で、子育てサロンみたいな形です。これも大阪市の事業としてやられていて、そこから補助金が出ています。

(2) ファミリーホーム

それからさっきから言っていたファミリーホームです。児童養護施設なんですけれども、これは国の制度です。大舎制といって50人とか100人とかが、子どもと一緒に暮らすような大きな児童養護施設という制度を、国のほうで、里親を増やしてより家庭的なとか、ファミリーホームの定員は6人なんですけど、より家庭的な少人数のほうに移行していこうと、今、国の方針が打ち出されていて。その中でファミリーホームってあるんですけど、ファミリーホームというのはこどもの里の3階部分でやられていて、定員6人です。

部屋、見てもらうとわかると思うんですけど、1階が遊び場です。ああいうふうなホールがあって、2階が台所と図書室になっていて、その隣と3階が里に住んでいる子どもたちの生活空間です。

今は6人の女の子です。僕が行ったとき、10年前は男の子も女の子も半々ぐらいいて、年齢も、一番上で中1かな、それぐらいだったんですけど、だんだん年齢層が上がって行って、ちっちゃいときからおる子はもちろん成長していくし。養育里親という里親なので、完全に親になるという養子縁組とかじゃなくて、原則18歳まで育てるという里親制度の里親さんを荘保さんがやっていて、里にいる子は大きくなっていくし、見相とかの判断で家庭に帰されていく子もいるしという中です。

でも、さっきも言いましたけど、基本的に地域の中に、釜ヶ崎近辺、行政区域は大阪市西成区なんですけど、西成区内の子どもとか、そういった形でやっていたんですけど、皆さんご存じのよ

うに、一時保護所もいろんな施設も常に満員状態で、どんどんどんどんその地域内外にこだわらずに、児童相談所からこんな子がいて、あんな子がいてって、もうほんほん話 comes 来ます。

来る子というのも、ちっちゃい子というよりは、もともといた大きな施設とかで不適合を起こして、全然、その地域からいきなり西成の釜ヶ崎のこどもの里に来る、思春期の真ん中に来るみたいな子が結構増えてきていて、すごく、職員さんも昔から知っている子だからこそ関係性とか信頼感とか、お互いにあると思うんですけど、ほんとうに思春期の真ん中でいきなりよその施設から放り出されて、見知らぬ土地に来て、またそこから子どもたちと一から関係をつくらなあかんという、なかなかやっぱり不安定な感じですね。暴言とかもすごくあったりもするんですけど、そういう大変さもあるけれども、今もファミリーホームとして機能しています。

(3) 自立援助ホーム

ファミリーホームは原則18歳です。措置延長で20歳、今は22歳になったんですかね、最大が法改正の中で。ファミリーホームは、15~20歳ぐらいまでの女の子なんですけど、自立援助ホームというのも、こどもの里の事業でやり始めました。

2年目か3年目か、この自立援助ホームをやるためにNPO法人格を取ったんですけど、ざっくり言えば、ファミリーホームの男の子版みたいな感じですよ。施設退所者とか少年院とかに入っていた子とかで、家庭に帰れないという男の子です。15歳から22歳ぐらいまでの青年たちの生活の場で、自立援助ホームというのをこどもの里から自転車で10分ぐらい行ったところでやっています。これも国の事業です。

(4) 自主事業

自主事業というところで、劇中の5才の男の子みたいな一時宿泊とか、今の制度で気づかれたかどうかなんですけど、つどいの広場、学童だった

ら、乳幼児、小学生、この子どもの居場所が条件つきになってしまうんですね。

その制度の中にはまらない子、中学生であるとか高校生であるとか、そういった子どもたちは漏れていくんです。その中学生とか高校生の居場所って、やっぱりすごく少ないんです。そういった子たちも利用できる。これは開館当時というか、ずっと里の理念としてあるんですけど、ほんとうに必要としている人は誰が来てもいいよというところで、ほんとうに0歳から18歳、それを超えてもというところで、誰が来てもいい場所というふうにして運営がされています。

映画の中であった、劇中の5才の男の子のお母さんが勉強会で講演とかに行っていましたけど、そういったことも自主事業としてやっています。だからすごく、まだまだ全部やっていることに対して行政からお金が出ているかと言われたら、総事業費の半分にも満たないというのが現状です。

(5) 利用料について

さっきのどのような場所かというところで、必要な人は誰が来てもいいという話をしたんですけども、ほんとうに基本的に利用料を取っていないので、おやつ代30円、お昼代が250円か300円か忘れちゃったけど、そんなのしか取っていないので、親の所得とかに関係なく通えるんです。

一応、玄関にノートがあって、来たら名前を書いてとかもするんですけども、子どもら、そんなのあまりしないですけど、親御さんに登録用紙書いてとかもするんですけど、もちろんできる家の子の親はするけど、そんなこと、できない、そういうような文化がなかったりとか、外国籍で字が読めなかったりとか。これ、学校とかも一緒だと思んですけど、そんなとき、登録用紙、出せへんから、あんた、来たらあかんとか、そんなこと関係なく、例えば、遠足とかに行っても、どうしても交通費が出されへんとかなんとかで、問題があってもツケにしておこうとか。

こどもの里の中で貯金箱を置いている子が何人かいるんですよ。だから、子どもの貯金箱もある

し、そういうだんだん青年期に入ってきた青年の貯金箱とか、それはスタッフが個人的な関係でやっているんですけど、金銭管理と言ってしまうばかりかたいですけど、でも、そういった支援助というか、地域の中で一緒に生活しているという関係性がすごくあるんじゃないかなというふうに感じています。

3. 誰が来てもいい場所がなぜ実現できるか

(1) スタッフの高い専門性

さっき、よその地域から来るという難しさの話もしたんですけど、基本的にはずっとちっちゃい小学生ぐらいのときからかわりがあるので、そこでやっぱりすごい信頼関係とか関係性ができてきています。

小学生とかは、中学生、高校生、思春期になって、学校で嫌なことがあったり、特に家庭の中ですね。誰が来てもいいから、俗にいう普通の家の子も来るんですけども、相対的に見たらしんどい家庭の子は多いですけど、やっぱり家庭のことってなかなか言わないんですね、子どもたち、隠すんですね。さらに、子どもは親を守るんです。それはなぜかという、やっぱり親のことが大好きだからです。みんな、そういうふうには隠すんですけども、ほんとうにそういう信頼関係がずっと続いている。

基本的に遊び場なので、遊ぶときは真剣にスタッフも子どもに向き合って遊ぶし、怒るときは怒るし、一緒に勉強したりご飯を食べたり、ほんとうに毎日の小さなことの積み重ねでできてくる関係性の信頼感ですね。そういったところからも起因して、もし子どもが何か困り事を抱えたというときは、子どものほうからやっぱり、学校の先生や親やほかの大人には言えないけど、スタッフの職員には言えるとか、そういったことで相談してくれるということがあったりだとか、それだけつき合いが長いからこそ来たりだとか。

子どもに関わる仕事って、よく社会から子どもと遊んでいるだけ、というふうに見られると思う

んですけど、そんなことはなくて、皆さん、すごい専門性を持っていてやられているんですけど、そういった専門性の中で、今の子どもたちの状況であるとか心理面であるとか、遊びの中での日々の言動、すぐ切れやすいような子とか、子どもの貧困、服の汚れがどうこうとかよく言うと思うんですけど、そんなこともトータルしてずっと子どもに関わりながら子どもの様子を見ながら、ちょっと今この子、調子悪いな、この子、家庭のなか気まずそうな、みたいな感じで観察していくわけです。

ですから、子どもの SOS とよく言うんですけど、そういった子どもの SOS に対する、見えるストレスも聞こえるストレスもそうだし、聞こえてこないストレスに対しても敏感にアンテナを張っているというところで、すごく子どもたちにとって、特にやっぱりしんどいことを抱えさせられながら生きている子どもたちにとっては有用な大人であり、すごく有用な場所なんだというふうに思っています。

(2) 互いに育ちあう子どもたち

誰が来てもいいというところで、非常に年齢層がばらばらなんです。赤ちゃんもいれば、小学生も中学生も高校生もいるという中で、職員が、例えば、ちっちゃい子とかにやること、中高生がちっちゃい子に対してやること、遊んであげたり、お世話をしたりというところを下の子たちは受けたりしていくわけです。周りに来る子どももそれを見ます。今度、自分が大きくなったときに、同じことを下の子にやってあげたりします。

子どもは子ども同士で育ち合っているというか、育児を覚えるといったら大げさに聞こえるかもしれないですけど、スタッフが料理をしていたらちょっと手伝ってやるとか、あまり料理をしない家庭ももちろんあるし、そういうところで1つの経験になる。おむつを替えていたら私も今度替えたり、というふうに、生活の中で子どもたちが成長し合って育ち合っている面もすごく大きいんじゃないかなとも思います。

来ている子の中にも、いろんな障害を持っていることもあります。程度の差はあるんですけど、多動とか、発達とかに障害があって結構疎まれる、学校や社会で疎まれる子とかに対しても、こどもの里には当たり前にいるから、そういう子たちに対して理解があったりとか、そういった子たちに対する対応ができたりとか。

それも周りの大人とか大きい子がやっている対応を見て子どもたちは学んでいくんですけど、そういったことができたり、結構身体の障害者もいれば、1人、子どものときからずっといる子で耳の聞こえない子がいるんですけど、耳の聞こえない子がいたら、指文字表とかを使います。子どもたちは、圧倒的に僕らみたいな大人が覚えるより早く覚えます。その子とコミュニケーションというか、遊ぶために覚えます。新しく来た子とかでも、ほんとうに3カ月ぐらいで50音の指文字、できるようになってコミュニケーションがとれたりとかします。

障害のある子が、耳の聞こえへん子がいつも必死になって相手の口元で言葉を読んだりするんですけど、いわゆる、障害者がいつも健常者に合わそうとしていて、健常者が障害者に合わそうというのはなかなかないですね。それを遊びとか生活の中で自然に子どもたちがやっているというのはすごく僕は個人的に魅力的なことだなというふうに思っています。

4. こどもの育ちと親の育ち

(1) こどものしなやかさを守るということ

本来いつも最初に話すことなんですけれども、ほんとうに今回、子どもたちが、ここに3人出てきて、いろんなしんどいこともあるけど、やっぱりすごい底抜けに元気で、パワフルで、エネルギーで、そういった子どもたちばかりなんです、こどもの里って。そこに5年間、気づいたら5年たっていましたって言いましたけど、そういった子どもたちからすごいそういう力を、僕自身、もらっていたんだなというふうに思いますし、そう

いう子どもたちの持っている力、生きる力であるとか、すごく人のことを思いやる力であるとか、人とつながっていく力とか、いろんな困難が降りかかってきてもそれをしなやかにね返していきける力であるとか、そういったものにすごく魅せられて僕はこどもの里に通っているんだなというふうに思うんですけども。

子どものしなやかさというのも、年齢がいけばいくほど、かたくなっていくんですね。そのしなやかさを守れるというのも、子どもたちにとって、やっぱりこのことは一人一人の子どものことをちゃんと理解してくれる、わかってくれる大人がいる、子どもにとってほんとうに意味のある大人がいるからだと思いますし、こういうふうに出場があることによって人も集まるし、そういった大人が集まるしというところで、こういう場の有用性ですね。家庭じゃなくて、学校じゃなくて、第3の居場所とか、すごいやり言葉のように言われているけれども、サード・ブレース、そういう場が大きいなというふうに思います。

(2) かたくなった大人が抱えるしんどさ

そのしなやかさなんですけど、大人になるとしなやかさを失っていく、かたくなる、それはやっぱりそういう大人と出会えなかったからです。そういう場がなかった、その後も心を閉ざしてきて心がかたくなる。そのかたくなったところを解きほぐすというか、しなやかなものにまた戻していく作業というのが先ほどのお母さんみたいな話になってくるのかなというふうに思うんですけど、ほんとうに難しく、幼少期に抱えたものを大人になってから解きほぐすというのは。

それはもう研究とかでも（そのことを指摘する研究結果が）出ています。困難を抱えた人間に対するかわりですね。子どものときから、幼少期になるべく早くそういった困難を抱えた人と出会って回復を図っていくというのも、年齢が早ければ早いほどやっぱり回復が早いです。年齢が高ければ高いほどほんとうに難しくなっていく。

だから、先ほどのお母さんなんか、出会った

ときはすごく、映画で映していないところもあるんですけど、ちょうど映画の5才の男の子が来たときに、僕が撮影を始めたときだったんです。それもちょっと時間がかかってしまったけど、地域の中の保育園、あおぞら保育とかやるような保育園が近くにあるんですけど、保育園からこどもの里に紹介が来て、ここだったらお泊りできますよということで、時間外、ちょっとお迎えとかがきついきもここだったら対応してくれますよということで紹介されて、ちょうど撮影を始めたところで、自転車に乗っていた男の子とお母さんが来ました。

今もちょこちょこ顔を合わせてお母さんとしゃべったりするんですけど、やっぱり里に来だした時はきつくて、そんなときから見たらほんとうに緩やかに落ちついていると思うけど、まだ波はあります。すごい波ですね。それだけやっぱり大人の抱える、大人の回復というか、大人は難しいです。

(3) こどもの成長が親の成長につながる

そういう意味でいうと、劇中の高校生の女の子のお母さんとかも一緒なんです。そういう自分の生育とか大人になってからの社会での経験とかで何か傷つきがあって、その傷つきに対しての回復ができない。だから、子どもは大好きで子どもは愛しているけど、二人とも、お母さん、それでもなかなかやっぱり子育てというのができない。

劇中の高校生の女の子のお母さんに関していえば、子どもが0歳で生まれてきたら親も0歳じゃないですか。その0歳の親が何を糧に育児をしていくかといったら、自分の育てられ経験ですね。自分が育てられたことを、周りからもちょっと生活は聞くけれども、それを統一しながら育児というものをしていくと思うんですけど、原体験としてそういう育てられた経験とか育てられた地域環境がなければ、じゃ、どうやって育てるのという話になってくるんですね。

そういったところの難しさはお母さんにはすごくあったなというふうに僕自身は感じています。

でも、子どもの成長が親の回復というふうに僕はすごく思うんですけども、劇中の高校生の女の子なんか特に思うんですけど、あの子には、妹がいるんですが、子どもと一緒に暮らせないけど、だんだんだんちょっとずつ大人に近づいていって、自分の人生をいろんな人に支えられながら歩いていく、そういったところをやっぴりお母さん自身が見ていると、お母さん自身もすごく回復していくというか、そういったところがすごくあるなというふうに思います。

おわりに

よく虐待とかで事件があって、報道されてよく親の非難とか、すごく鬼畜の親だ、みたいな言い方をされると思うんですけども、それは死んだ子はかわいそうですね。でも親だけを鬼畜の親とか言って無責任に批判だけをしていても、絶対なくなるらないんですね。普通に考えたらわかるんですね。ちっちゃい子どもを殴って蹴って、ってしませんよね。でも、するんですね。

じゃ、何ですのかということ突き詰めて突き詰めて考えいかないと、社会のこととか社会の中で社会の人たちで考えていかないとだめだと僕はすごく思っていて、ほんとうに無責任に親の批判をするだけじゃなくて、じゃ、なぜ親はそういうことをしたのとなったら、そんな親の中にあるからですね。虐待の連鎖なんかよく言うけど、虐待の連鎖といたらちょっと何か軽くなるから僕はあまり嫌なんですけど、でも、一つの事実なんです。全てとは言いませんが。そういったことも一緒になって考えていけたらなというふうに思います。今日は重い話が多かったと思いますが、ありがとうございました。

〈質疑応答〉

Q1. 釜ヶ崎という場所の特徴

【質問】映画の中の一場面、子どもたちが運動会をやっているときに、背景にあべのハルカスが見えた。片や、あべのハルカスのような資本主義

社会の象徴みたいな対比と、底辺のところにいる、生きている方々のささやかな何かひとときが妙に心に残った。

【重江】ありがとうございます。あべのハルカスって知っていますか、皆さん。日本でしか、あれ、高いビルなんですけど、釜ヶ崎があるのはJRの新今宮駅という、大阪の環状線の一番南側のところにあるんですけど、隣が天王寺という大きな繁華街です。北へ20分ほど歩けば難波、ミナミがあって、新今宮って立地的に今すごいんですね。地下街もできて地価は上っていてなんですけど、観光客の増加とも比例していて、すごく街の様相も変わってきています。ああいう映画の中で出ていた町並みとかもこれからどんどん変わっていくというところがあるので、大阪、近いのでぜひ、ご興味のある方は釜ヶ崎へ。B級グルメもおいしいですよ。

Q2. こどもの里の運営について

【質問】泊まりでも引き受けているということだが、スタッフの方も夜、詰めなきゃいけないし、かなりの資金が要すると思える。市からの委託事業だけで、さっき半分ぐらいがそういうものだと伺ったが、その他にどういう資金が入っているか。

【重江】泊まりとかでも実費以外は取っていないので、一次宿泊なんかはもう一切、予算はついていないのですが、月初めの一週ほど里の前でバザーをしています。全国から物資が集まってきてバザーをしている、あれが収入源のひとつです。年末なんかは地域の中で里の周りと保育所の前なんですけど、結構大バザーみたいなのをしたりもします。大半は寄附です。もう半分ぐらい寄附です。

【質問】企業のほうからか？

【重江】いや、企業とかもあるんですけど、個人が多い。細かい比はわからないですけど、個人が多いです、聞いていると。そのリーフレットの中にはちゃんと振り込み用紙が置いてあって、ゆとりのある方はぜひお願いします。

あと、今日、パンフレット、持ってきました。

1部800円なんですけど、フルカラーで映画のパンフレットは10ページとかそのぐらいしか普通はないんですけど、これ、46ページあって、荘保さんにインタビューして文字起こしとか、釜ヶ崎の街のこととか載っていたり、ふだんの子どもの様子とか、写真で入っていたりとかしますし、映画のストーリーというところ、シナリオじゃないけど、載せていたりして入っている。また活字で読んだらいろんな発見もあるかと思うので、興味のある方はぜひ。

Q3. 釜ヶ崎（西成区）の就労状況

【質問】釜ヶ崎という場所は、昔は革マル、今は新左翼というか、そういう人たちの最後の拠点というか、残った場所だと聞いていたが、そういうところはやっぱりまだあるか。

私もいろいろ現場とかで働いていたが、やはり親の働けるということが基本的に大事だと思う。愛知県はトヨタとかあるので条件はいいと思う。しかし、やはり親の仕事というのが大変で、その辺がひとつどうなっているのかなということちょっと知りたい。

日雇いが多いとかでしたが、荘保先生が言うにはだんだん減ってきているとか。だから、新しい今の自立するための方法というのが今、ちょっとなかなか難しくなってきた、昔だったら料理とか手に職をつけてとか、読み書きそろばんというのである程度できたかもしれないが。今はもう車も自動運転になって、ロボットになって、そういうちょっと勉強の苦手な人とかどういうふうにやっていったらいいのかというのは大きい問題だと考える。行政のほうは職業訓練とか、やったふりをする。パソコン教室、時間だけやりました、何人の人がやりました、ということで終わってしまう中で、本当にどのような対応が要ると思うか。

【重江】日雇い労働者の街ということで釜ヶ崎があるんですけど、日雇い労働、今でもあります。朝5時にシャッター、あいて、求人業者が来て、今は景気がいいので、非常に働く人が足りない状態です。里に来ているような、中学校を出て高校

に行かなかったり行ったりとか中退したりとかいう子らでも日雇いで働いたりもしているし。

日雇いの制度自体はいいことかなと思うところはあるんですけど、やっぱり回らないところがあるので、その必要があるなというふうに思うし、ある程度いろんな、普通の社会の中の企業とかそういうところで働くのが難しい人は、やっぱりああいうふうな、1日やって1日体を使って働いて、その日の銭をもらおうというようなのが合っているところはあるかなというのは事実です。

映画の中でも言っていたみたいに、日雇いのお父さんというところはもうほぼ減っています。何人かいますけど、減っています。それから見ていたら、今、父子が多かった街だったけど、母子です。とてもひとり親の家庭というのがすごく多いです。

そこでちょっとお母さんが精神的に無理というところでは生活保護を受けながら、何とか就学援助とかそういったことをやっていますし、働けるお母さんなんかでいっても、もう非正規ばかりですね。その非正規の中でやっぱり介護とか夜勤があるとか、長時間拘束されるような仕事が多いとか、そこでこどもの里に子どもたちを、ちっちゃい子がいて連れてくるというパターンが多いです。その社会構造のところですね。非正規で働いている女の人の賃金というのはほんとうに、世界的に見てももう最悪ですね。ひとり親家庭の貧困率って、50%を超えているんですね。そんな国、先進国でこの国だけなんですね。

だから、そこから見てもやっぱり変えていかないといけないなと思いますし、僕、映画のほうも今また改めて、今度、釜ヶ崎という街がどんどんどんどん変わっていくので、そういったところも撮りたいなと思ってまた映画をつくっているんですけど、映画なんかやってもご飯が食べられないので、ちょっとインターネットニュース、動画つきのニュース記事とかもやったりするんですけど、今月末か来月頃ぐらいにまた配信します。

これ、ちょっと宣伝になりますけど、Yahoo! Japanさん、Yahoo! ニュースのほうで配信するん

ですけど、西成区西成高校という、またすばらしい学校があるんですけども、その西成高校にも反貧困学習という授業があって、そういうところの取り組みを追いかけて、荘保さんも講師として出てきて、二時間ぐらいばつとしゃべっていたんですけど、やっぱり就労形態とか労働法じゃないけど、社会構造のほうにすごく矛盾があるしいびつなので、そこに発言していかないと、例えばお母さんたちの待遇も改善されないし、忙しい忙しい忙しいで、金、稼がなくて働くからこそ子どもとかかわる時間が減っているわけやし、働いても賃金は最低ライン、生活保護レベルの賃金になってくるので、そういったところにも触れているような動画にはなっています。

荘保さん、よく言うんですけど、子どもの貧困

なんてよく言うけど、子どもの貧困って、その家族の親のしんどさであり、家族の貧困なんですね。そういったことをほんとうに皆さんがつながってやっていってくれたらいいなというふうに思いますし、今日の映画を見た感想とか、別に何か社会に異議を訴えるとか、特別考えて映画は作ってないですけど、とりあえず見て、何か子どもらの姿観て楽しかったかなと。でも、何かいろいろややかしいこと、あったなぐらいのことを覚えて帰ってもらって、皆さんそれぞれの場所で友達とか家族とかにシェアして行って、いろいろこの映画の感想とかを話し合ってくれたら、それは1つの広がりになるんじゃないかなと思っていますので、またよろしくお願いします。